

グループの強みを生かし、グループ全員でつくる、 “質向上スパイラル”

桜十字グループは約9,000名が働くグループへと大きく成長しました。
私たちにとっての財産は、病院事業・予防事業・高齢者事業などヘルスケア分野を中心に多岐にわたる事業を展開している多くの仲間がいることです。そして、各現場には、地域に選ばれる病院・施設・事業所になるために積み重ねてきた、たくさんの努力と工夫があります。

私たちCQ推進部は、この優良事例発見ラウンドを通じて、皆さんがこれまでに蓄積してきた努力と工夫を全グループに発信することで、質向上のスパイラルを作っていきたいと考えています。

1つの病院だけでゼロベースから考えるのではなく、グループの強みを生かし、仲間たちの知恵と工夫から、さらに良いものへと進化・改善させていく。このスパイラルが、私たち桜十字グループを日本一のグループへと押し上げてくれるはずです。

桜十字福岡病院（福岡市中央区）

病院:199床

回復期リハビリテーション病棟/100床

地域包括ケア病棟/49床

障害者施設等一般病棟/50床

老健:100床

デイケア:110名（定員）

実施日時：2024年9月25日

桜十字福岡病院対応

猪野事務長

角野看護部長

遠藤統括 他



Sakurajyuji Fukuoka Hospital.



Contents <病棟>

- 01 「NICDを広めたい」現場を巻き込み熱意を伝える極意！
- 02 センサーマット使用ゼロで身体拘束しない病棟へ
- 03 “リハビリ充実”の地ケア病棟アピールで差別化へ！
- 04 「食べたい」を刺激！低栄養を改善し、在宅復帰へ

01

「NICDを広めたい」 現場を巻き込み熱意を伝える極意！

桜十字福岡病院では、熊本の桜十字病院で取り組んでいたNICD（生活行動回復看護）を導入して、「看護・介護が変われば患者さまの人生が変わる」を念頭に諦めないケアを実施しています。

NICDの詳細については、こちらをご確認ください
<https://sj-fukuoka.or.jp/admission/nicd.html>

松本師長とNICDメンバー



01 「NICD広めたい」現場を巻き込み熱意を伝える極意！

桜十字福岡病院では、地域包括ケア病棟の松本師長（特定行為看護師）を中心にNICDに取り組んでいます。導入から実践に至るまで「どうすればNICDが広まるのか」と常に問い続けたそうです。松本師長とNICDの1期生、2期生が実践した、現場を巻き込む極意についてご紹介します。

01

スタッフが見守る中で実践 “百聞は一見に如かず”

スタッフステーションそばの多くのスタッフが見守る中で実践しています。すると一部のスタッフが患者さまの変化に気づきました。「あの無表情だった患者さまが笑顔に！」「寝たきりだったのに車いすに移乗できている」。NICDを学びたいと申し出るスタッフが1人増え2人増え…。現在、看護師、ケアワーカー、新卒、ベテランを問わず、実践できるようになっています。

02

時間は、とにかく“つくる” おむつ交換は全員で協力！

患者さまの回復のためには、NICDを毎日継続することが重要に。そこで、NICDに取り組む時間をつくるために、例えばおむつ交換は全員で協力するなど、業務効率を進めました。「マンパワーがないことを、患者さまを離床させない理由にはしない」と覚悟を決め、病棟全員で取り組みました。

03

患者さまの変化を喜び、 みんなで“共有”する

寝たきりの患者さまが移乗して食事やトイレで排せつができたり…。患者さまの変化を、みんなで喜び、共有します。患者さまの変化が、休憩室の話題の種となり会話も盛り上がります。「今日の〇〇様の表情いいね」と医師が声をかけてくれたり、リハビリからも依頼がくるように。看護介護スタッフの自信にもつながっています。

01 「NICD広めたい」現場を巻き込み熱意を伝える極意！

成果：NICDに取り組む仲間の輪が拡大中！！



**患者さまを中心に
チームワークが取れるように！**

回復につながったたくさんの事例が生まれました。患者さまを中心に、看護、介護、ST、栄養士など多職種のチームワークが深まりました。



**みんなでNICDを実践
仲間の輪が広がりました。**

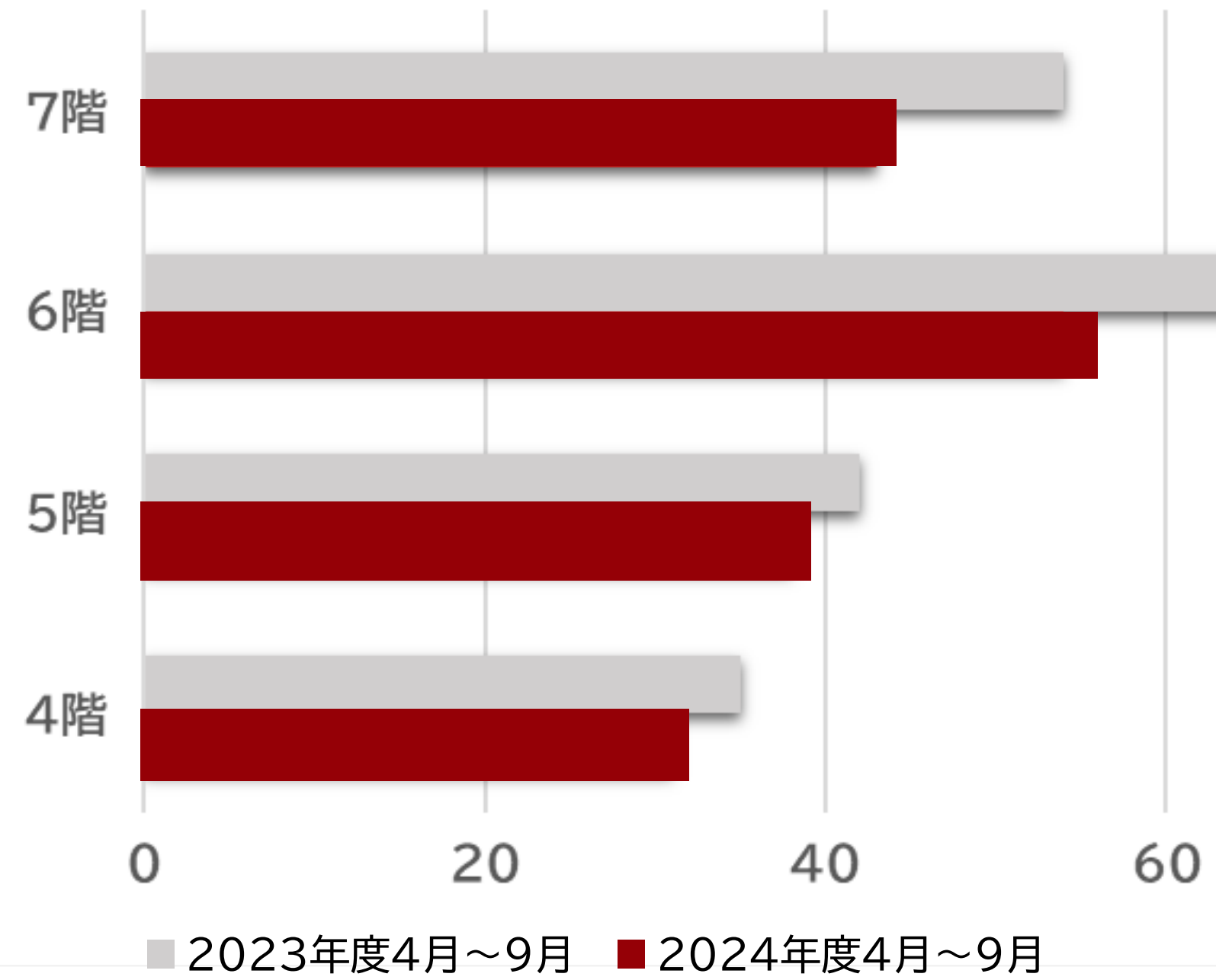
3期生の修了式の写真です。桜十字大手門病院からも6名が加わり、1期生、2期生、3期生とNICDを学ぶ仲間の輪が広がっています。



**採用力UP! NICDに関心のある
応募者が増加！**

就職説明会でPR。入職希望者の見学でもNICDの実践をみてもらっています。NICDに関心を持って入職する看護介護スタッフも増えています。

センサーマット使用「0」なのに 全病棟で転倒転落件数が減少した理由とは？



全病棟の減少率

17.4 %

センサーマット使用ゼロで身体拘束しない病棟へ

02 | センサーマット使用ゼロで身体拘束しない病棟へ

まず「センサーマットを使用しない」ことを宣言し、2024年7月から全病棟で「使用0」を達成。全病棟で転倒転落件数が減少しました。マットを使用せず、身体拘束のない病棟づくりを進めています。

センサーマットを使用しない！病院としての姿勢を示す

根拠のある 説明用資料を作成

センサーマットを使用することの弊害など、身体拘束しない病院であることを明確にし、誰もが説明できるよう資料を作成しました。

スタッフが しっかり理解する

看護部長から各師長へ。さらに師長から主任、主任から補佐、補佐からスタッフへ。時間をかけて、スタッフへの落とし込みをしました。

ご家族に しっかり伝える

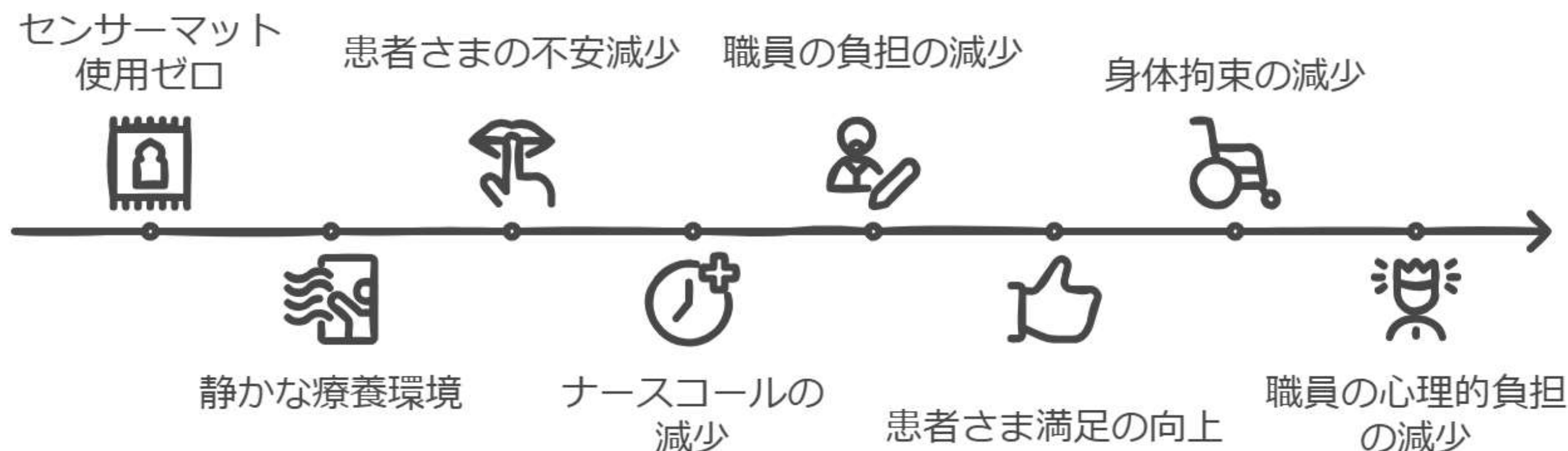
マット使用 ≠ 転倒転落予防をしっかり伝えます。「前の病院で使っていたから…」とマット使用を希望するご家族もありますが、病院の姿勢を説明し、理解を求めています。

尿意・排泄（おむつ） チェック表の活用

転倒転落は夜間帯に多いためリスクの高い患者さまをリストアップ。夜間の排尿時間を可視化し、患者さまの排尿パターンに合わせて1～3時間毎の排泄誘導やおむつ交換を実施しています。

02

センサーマット使用ゼロで身体拘束しない病棟へ



**静かな療養環境を実現。
患者さまも落ち着いて過
ごすことができるように!**

センサーマットの音が鳴り響かないことで静かで落ち着いた療養環境に。認知症患者さまの不穏や不安も軽減しています。

**ナースコールが激減。
患者さまと向き合う
時間が増加!**

ナースコールが減り、職員の仕事量も減。患者さまと向き合う時間が増え、CS満足も向上。身体拘束を行うことに対するスタッフの罪悪感も軽減され離職防止にもつながります。

**転倒転落の件数が減少。
患者さまの安全環境に
ご家族も安心!**

以上の結果、転倒転落の件数が減少。さらに全病棟の身体拘束の件数も11件から2件へと減りました。数値で示すことができ、患者さまご家族の理解もさらに深まります。

個別リハ×集団リハ×自主訓練

“リハビリ充実”の地ケア病棟アピールで差別化へ！

03 “リハビリ充実”の地ケア病棟アピールで差別化へ

地域包括ケア病棟は提供単位数が限られ、一般的に「リハビリができない」イメージ。そこで、個別リハ×集団リハ×自主訓練を組み合わせた仕組みを構築。“リハビリが充実した地ケア病棟”を打ち出し、他病院との差別化を図りました。



個別＋集団＋自主訓練で、訓練メニューを計画

リハ回診で患者さまを評価。

- ①個別リハ＋集団リハ
- ②個別リハ＋自主訓練
- ③集団のみ ④自主訓練のみ

4パターンで訓練メニューを計画。



リハ助手中心で、集団リハビリテーションを提供

リハ助手が中心となって定時に集団リハを行います。リハビリスタッフはその様子を見守り、患者さまの運動負荷が適切かなどを評価します。



退院後も取り組める、自主訓練メニューでやる気アップ!

自主訓練は、患者さま自身でチェック表を用いて管理。1週間ごとにリハビリスタッフがその内容をチェックして、必要に応じて訓練内容を見直します。

リハビリが充実した 地ケア病棟アピールで稼働に貢献

リハビリの提供単位数が限られていても、個別・集団・自主訓練をシステム化したことで、運動量が増え、満足度の高いリハビリを提供することができました。

地ケア病棟担当になり最初はラピストとしての専門性が発揮できないとネガティブな捉え方をする側面もありましたが、患者さまが率先して運動する姿を目の当たりにし、専門性をどう発揮するか、視野が広がったと感じています。

他病院と差別化を図ることができ、「リハビリができる」桜十字福岡病院の地ケア病棟をアピールすることができています。



リハビリ本部 金古主任

「食べたい」を刺激！ 低栄養を改善し、在宅復帰へ

私たち医療専門職がカロリー計算や捕食を提供するなど、どんなに尽くしても食べられない患者さまが一定数います。「食べられない」と評価しがちですが、本当にその評価が正しいの？

「食べれない」＝経管栄養・点滴となる、それでは在宅復帰も難しく、入所できる施設も限られてしまう。退院後に患者さまが望む暮らしをするために、何かできることはないかーという思いから食思向上の会を立ち上げました。



04 「食べたい」を刺激！低栄養を改善し、在宅復帰へ

低栄養のままでは在宅復帰もできず入院が長引くことも。そこで多職種で「食思向上の会」を立ち上げました。食思がアップして脱水症状が改善し、在宅や施設入所につながったケースも。食べられることで、退院後の患者さまの選択肢が増えることにつながります。



五感を刺激＋α スタッフも一緒に楽しむ

「匂い」の刺激は効果的。たこ焼きソースや餃子を焼く香ばしい匂いが食欲をそそります。にぎやかな雰囲気づくりによって食欲をさらに刺激します



多職種で取り組む Ns, CW, リハビリ, 栄養士

レクリエーション要素が強い取り組みですが、終了後に評価表で摂取状況・表情・姿勢などを多職種で検討しています



継続は力なり！患者さまの 笑顔がモチベーションに

定期開催を目指しています。「30年ぶりに大好きなラーメンを食べた」と感涙する患者さまも。患者さまの笑顔がスタッフのモチベーションとなります

お問い合わせについて

今回ご紹介した事例についてのお問い合わせは、桜十字福岡病院の猪野事務長へ。
レポートについてのご意見ご要望も、お聞かせください。

CQチーム

中川 朋子（なかがわ ともこ）

メールアドレス t.nakagawa@sakurajyuji.jp

松枝 留美（まつえだ るみ）

メールアドレス : r.matsueda@sakurajyuji.jp

桜十字福岡病院

事務長

猪野 嘉一（いの よしかず）

メールアドレス : y.ino@sakurajyuji.jp

アンケートにご協力ください

<https://forms.gle/G5hZd4WqN2wbEWNi7>

